

師は河辺を残して全員辞任し、新たに島田佳矣が教授に就任した。

島田は絵画科（日本画）を明治二十七年二月に卒業し、東京高等工業学校図案科助教をつとめていた図案家である。さらに、フランス留学から帰国したばかりの岡田三郎助が教授として加わった。建築図案の教室は河辺と同期図案科卒業の千頭庸哉が助教として起用され、武田五一が留学のため辞職して大沢三之助が教授として再起用された。この人事には学校当局の図案教育刷新拡充の意図がよく現われているといえよう。ただし、小場恒吉の「図案科思ひ出」（99頁）などによれば、新しい西洋図案の導入による教育の大改革を期待していた生徒たちにとっては、この改革も姑息なものでしかなかったようだ。

明治三十年代の『東京美術学校校友会月報』には本校内外の懸賞図案募集の記事が頻繁に掲載されている。それらの高賞をさらったのは図案科生徒沢田誠一郎と十二町貞吉で、ともに明治三十八年に卒業。十二町は富山県工芸学校へ赴任し、大正八年死去。沢田は郷里の京都へ戻り、陶芸家沢田宗山となった。

⑦ 山田鬼斎死去

明治三十四年二月二十日、彫刻科教授山田鬼斎が病死した。享年三十八。二十二日、浅草吉野町光照院で葬儀が行われた。鬼斎は木彫部において木彫のほかに塑造による人体研究の指導にあたった（11頁高村光太郎の回想記参照）。夫人蝶子は岡倉覚三の妹であった。

⑧ 学生生活

美術學校生活

辻 永

中學校を出て美術學校に入ったのは、明治卅四年の春で、正式に洋畫の課程を修めたのである。それまで田舎（水戸）にゐた。中學校の圖畫の教師は丹羽林平氏（明治三十一年西洋画科卒）であった。白馬會の會員で小林萬吾氏、白瀧（幾之助）氏、湯淺（一郎）氏達の仲間だったのです。私は畫家に成る氣で、其の畫の先生の所にゐました。ほんとうの油繪を見たのは、其の先生のが初めてで、今でも記憶してゐるのは、其の丹羽さんが横濱の原善三郎氏の大きい肖像を描いてゐた。それを見て非常に感心した。（恰度卅二、三年の頃）自分もあんな畫をいつになつたら描けるか只感心してゐるばかりだった。そして、まあその先生の油繪具を借りて、中學校の庭から筑波山を、一、二度描いた。それが私が初めて油繪具を使ふ初めである。自分も珍しかつたし、その頃の學生に限らず、とにかく珍しいものだった。この丹羽といふ人は割合に不遇で、とにかくつたが、風裁が良い人で、それは餘談だが、女の人にさわがれななどしてゐたのも、原因だったかもしれない。私が丹羽さんの家にゐる頃、そのお母さんが、學校を出ても決してエカキなんてなるのを、およしなさいと、しきりに言はれたことがあります。

學校の教材として古事記といふ題で、何か書けと言はれた事がありました。その時私は例の^{（だ）}コジキたと思つて、巖窟に乞食がある所を寫生して大笑ひされたことがあります。

今でこそ中學生が油繪を描いても珍しくないが、とにかく今から卅年近く前のことですから、水彩繪具を使ふことさへも容易でな